





ニサル
トル
氏ゼ
第三リ
イドル
卷の下



愛應義塾同社

松山棟菴

譯

志邊里屋の女丈夫の事

○此女丈夫ハ普良須古球といへる少女なり彼
 一千七百九十五年ハ當り魯西亞の帝ハ歎願
 して其父ガ追放せられたる赦免を得んガ為
 小志邊里屋より新都平土留保留府ヲテ遙々
 と數百里の旅行をなして其間八個月の久し

第三リ

卷之下

57074

きつ費せりとつふ○志邊里屋ハ魯西亞帝國
の一部分として世界中小比類少りて寒國
○佛蘭西の婦人骨砧が著したる志辺里屋
追放記と題せる物語の趣意ハ普良須古琲が
この艱難の一事として普ねく世人の愛讀を
する所なり下文小記も如き新都平土留保留府
小かゝて魯西亞の皇后と普良須古琲との偶
然の對話ハ全く其実録なり
后汝少女近く進みて吾傍に坐せよ我汝が物語

小付きて尚も聞まなく思ふ事有り汝此旅行
を思ひ立し始めハ何物ガ汝の心を動かせしや
汝ガ父こそ汝を勧告しや 噫否ありらば吾父ハ
固く此事を許さざりしや名其同意を得るまで
小父はく月日を重ねしガ妾ハ日夜天と拜し
吾父の許させ給ふんことを願ひしより終小願
望成就しといと嬉敷旅路不出立致したり 后汝
ガ母も同トくらの企を許さざりしや 少女吾母も
始ハ妾ガ此企小異名して妄想の謀と云ひ笑

ひーくども一年二年と日を重ても妾が志しと
 変ぜさくもバ妾が深き思ひ込も天の命む所
 らんと母が信仰りりより遂ふ此企を助くる
 小至まり右さきバ汝ハいりふして帝の御前
 出るを得んと豫トめ定めーや又汝ハ貧しき身
 小して親しき友も何とぞ小如何ふして帝の
 御聴りんとハ兼て望を起せーや少女假令一
 人の弱き女ふぐりも其志を所ハ兩親の追放
 せしき望を身と助ふんとたりバ必だ天

の恵も有りて親しき人も多かんと思ひ又妾
 ハ天の此身を護らせ給ふを深く心お信ぜー也
 忠其護まハ決して吾身を誤しことなり右汝ハ
 かなくの憂き旅行なりーが更ふ艱苦もなうを
 ーや又身の危ふき難お逢ハぎをーや少女吁う
 も問せ給ふ哉妾ハ二回び病お罹り一回び水小
 溺まんとせり又或る日の事なりーが淋しき僻
 郷あて日もさや暮たろ小一夜の宿を需めん小
 も便さなく或偏の外おたろぎみーと一人の

高
 三
 下

老翁りりて始めハ妾を咎め呵りーが遂ハ妾
 の跡を逐ひ来りて彼ガ住家小案内せらるたり
 此家の内小老婆りりーが老たる夫婦共其面
 貌の善人とも見へざり其時妾ガ心ふも甚ど
 驚きたり叔妾ハ内小入て坐を占まハかの老婆
 ハ物静小門の戸を鎖して後夫婦の者妾は向ふ
 て云く汝ハ何國小赴くものなりやと問ける由
 名妾ハ新都平土留保留府を赴く者なりと答
 へりバ老人の云く左程小長き旅行をせん小

ハ定めし數多の旅金を貯
 持しりりと妾ハ偽りもあ
 く其實を告げり只コッペー
 ク魯西亜銀貨の名九を二
 三貯たりのなりと云ひ
 たまども夫婦の者ハいと
 厲々しく猛き姿あて汝ハ
 偽り云ふなりんと痛く
 妾を非難せらるたり 右少



志邊
 里屋
 山中
 の景

女よ汝其時大お恐きぞぞりや今云へる夫婦の
 者ハ必む盗賊なりべし斯る危ふき難小逢つ
 よくも其身を保ふせーや 少女老たる夫婦の早く
 寝間小入べーといひける中お妻ハ其言小従ひ
 寝間入たきど若し夫婦の者ガ吾財布を吟
 味せんとかたば吾言の詐アなき汝知しぬんと
 て懋と意を用ひて吾財布を寝床の傍小出置
 たり然る小夜半の頃いと劇しく呼起せし中
 眼を開きて見きバ彼の老婆ハ妻ガ枕下小突立

たり妻ハ其恐しき小身の毛もよだつ計なり
 ガ老婆ハ財布を開き見て其中小さしたる金子
 の何ささきハ望を失ひたる体なり此時妻ハ只
 管命を助け給へと願ひこの財布の外ハ更
 金子の用意ナシと云ふきど老婆ハ返答もせず
 妻ガ衣服と一々取調べ長沓の中おも金子ハ
 きりと吟味せり老人ハ手小燈火を持て老婆小
 付添ひ色々詮索しおきど妻ガ身小金子の何
 ざりしりバ終小妻を見限ると彼方の部屋へぞ

立去せける 后さきバ汝ハ其隙小彼等ダ住家と
遣も出人とせざりしや彼者共ハ汝ダ身小取
べき物のやきふ怒を痛く汝を呵責する事も
あるべき小汝ハいふ小事のあらずばべしと
ハ思ひたるや妾も初め小ハいふ小もして此
屋を遁も出人ものと思ひしが能々憶ひ回
バ斯すても天の吾身を護らせ給ふかりきバ此後
とても必を其護をあざべしと篤く心小信ぜし
中名唯一心小天を拜して先吾父母を為め次小

吾身の為め又次小彼等夫婦の為小も其幸福を
下し賜ふんこと成念トつて斯して後心静小安
き眠小就しかり扱又明る朝妾ダ起出し頃ハ
窓の戸照を朝日影降敷く雪小映きていと麗ハ
しき景色なりしが老たる夫婦ハ朝飯を取んと
て忙もしき体なり妾ハ定めて無氣小も扱も色
んと思ひ惶々かごと寝所を出行けしが案小相
違の事小て老婆ハいと深切又妾を扱ひ昨夜ハ
よく休ミ給ひしと挨拶せしと中名妾ハ答

へて仰の如く昨夜ハ心よく休となり今ハ旅路
小出立せんと思ふなりと云ひ事色バ老人夫婦
ハ妾小勧めて先々らハ小坐を占めて朝食なり
とも取て給へと云へて右そハ汝を毒害せんと
の謀ごとかり夫婦の者ガ情けりげの面容ハ必
む詐ありけりなり汝何品小ても喰ざりせむ
宜らんと思ふあり妾さきども妾ハ甚ど飢たも
バ多くの食を取きこの時老人夫婦ハ妾ガ身
の上を尋ねり申名妾ハ路用の金もけりて吾家

を立いで帝小歎願して吾父の追放せらるる赦
免を得人為め人の高小立浴て其憐を乞なりけり
新都平土留保留府より獨り旅する云々の由と
残り方なく物語きバ夫婦の者ハ妾ガ話小耳と
傾け眼小涙と流たり老婆ハ妾を傍らより引よ
せ云ふハ願くハ昨夜の事を忘き玉へこハ
場の夢との思ふハ汝ガ心意のやさしきと
其身の上の憐き小禁ガ心をも柔けたり汝此家
と出て後路用の金子を算ふるなりバ禁ガさの

と悪人ふもけりざる事と思ひ知らるべしと斯
て夫婦の者ハ妾を深く親しと妾が口吻をも啜
またまきバ妾も懇小暇乞て旅路の方小出行た
り扱二三里許も路を行たる頃々の老婆が云ひ
一ことの合点行ぎまきバ財布の中を調べんと頓
て之を開き見まきバ不思議や賄の外小又四十司
ペークを増たきバ妾が驚き大方なむ其後人
の話の聞けば彼の夫婦の者ハ果して名高き盗
賊の由なり一后汝が舉動ハ無為小して巧ふく

且汝が旅行も趣意ハ人の心を感動らるけき
バ彼の老たる夫婦が罪深き頑固の心さ人も解
たるなり又汝が彼等の為ふも其幸福と祈り
事の天の耳ふも聴へし人加之ありて人の
罪をも贖ふべき汝が善根の種ともて夫婦が心
の田小蒔たきバ彼等が流せし涙ら其種を養
ふべきより潤ひとハなりたるあかめハ肯
て望む所なり扱又妾が父の追放の赦免を得べ
き望もけりや何の時父の事ハ帝の御聴らる

べきや我王宮小誘き斯く眞實小扱るる
と若し我父小知しめふバ父が心を勵まして其
喜びハいりたり人 后今汝小聞せて悦ませなき
事あり乃ち吾手小持てる此書付ハ汝が父を赦
免らうる魯西亞の内地小歸るべき旅行の路用
の金子を渡せと吾帝より仰せり汝が
の嬉さ小氣を取失ふことなりきとて其書付を
示さきたり

氣高き心の威勢ある事

荒火屋の沙漠小住する一人種の中小根比亞と
云へる善人ありて一匹の名馬を所持せり同國
の他人種の中小太非亞といへる人ありて頻て
ふこの名馬を懇望して得ずなく思ひ或はハ
自か所持せし駱駝と換人ともいひ或はハ彼
の馬を譲るなりバ我身代と盡く與人ともいひ
たきども根比亞ハ敢て兼引ぎふお色ハ遂小彼
の馬を手小入べき一の謀とぞ思ひ付けさき
ハ草の絞汁小て自か顔を染め身小襪褌と纏

ひ長き紐をもて一本の足を頸に結付け偽りて
跛の乞食とあり全く容貌を換て彼の名馬の主
人根比亞が通ふべき路筋に出で其来を待
受ーが斯とも知らぬ根比亞ハ美々たる馬小跨
と此鬼小迫きーが右の乞食ハ態と細き聲を立
て根比亞を呼かけ僕ハ貧しき他國の者なり
が三日三夜の其間食を需むる便をなく空しく
ろ小留りて今將小死せんとせし君若し僕
と助るやと後日必も天の報應何んぞと辞を

巧小云けは根比亞ハ馬上より之を聞て汝
我と共に此馬小乗らば吾家小伴ふべしといと
深切小いひ事も彼の乞食ハ僕甚ど疲れたれ
ば起き上りき人叶もはといひけるや名根比亞
ハはるく憐みの情小堪へま自か馬より下り
響と取て此質乞食の傍小より様々と介抱して
やうく彼の馬小乗らしめたり斯て太非亞ハ自
う小鞍小跨りたるを忽ち鐘を蹴り立て馬を飛
して行つ根比亞を顧みていそく斯くせし者

ハ太非亞たひやなり我今汝われいまにが馬うまと

得えて已いま小吾有わがとせし

とさきとも根比亞ねびやハ格別かくべつ

驚おどろきたる氣色きしよもなくこそは

指招さしざうきて汝暫なんぢしばしばらく止とどり

て吾云われいふ事ことを聞きくべ

とといひけり小太非亞たひや

ハ馬上うまの上の事ことなを假たしか令追いまひ

ることも適あてり小易やすかりなりと思おもひ

つ馬うまの頭あたまを引返ひきかへして根比亞ねびやが杖つゑ小突つたる鎗やり

の石突いしつの間ま近ちかき鬼おにを歸かへり来きる根比亞ねびやの云い

ふやう汝今なんぢいま吾馬われうまと奪うばふたりこハ自みづかり天意てんい小

出いる所ところを實まこと小汝なんぢが喜よろこびを祝いわる人ひと一ひとききと

も汝なんぢが此馬このうまを得えて謀まかごとハ決けつして他人たにん小語かたり

辱おとしつるを太非亞たひやハ之これを聞きて甚たがと訝あやりし思おもひ

ひをハ又何故なんぢまた何ゆゑなりやと尋たづねけり根比亞ねびやの云い

く何なんれとみよバ若もし世人せいじんの實まこと小病びやく苦くる小惱なごり

者ものり人ひととき我今われいま欺あやむるを一如ごとく他人たにんも亦また欺あや



むうもんことを恐る時ハ假令その救ふべき
とも救ひ能てざることの怖る人けはあり故
小若一この事と他人小語らバ汝ハ人をして仁
愛の行ひと損ふて一むの賊ともなりぬ一と
云事とバ太非亞も之を聞て感服一心中大恥
たる様子小て暫時をのとも言さる一良あり
て自か馬より飛下せ馬を根比亞小逐て其
足下小踏つき只管罪の宥さ人ことハ成らん
斯て太非亞ハ其罪と容易く免さしけりハ根比

亜を伴ふて已々住へる天幕の中小歸て二三
の間根比亞とらく小逗留せしめて爾後ハ互小
親しき朋友とハなせりや

良美由須ガ事

往昔佛蘭西小て有名なり理學者昆井留良麻ハ
學者の社中小く良美由須と云ふ人あり此人の
幼少なり時行ひと見えバ假令天稟英才の人
たりとも亦必を致々汲々とて學問小勉強せ
ざるべからざれこと証する小足一抑この

良美由須が祖父ハ白耳義小て禮圖といへる地の貴族なり一が或時國中兵乱の爲小悉く家産と失ひ事ハ當時乱を避て佛蘭西ニ往き終り小炭を賣買して一家の生業と營り一程カモバ常々其子の教育小も暇アリて良美由須が父ハ一生貧しき農夫あり一が彼の一千五百十五年小當りて良美由須ハ誕生せり却説此良美由須ハ齡ハ劣り小八歳の時粗末なり農夫の衣服と着し毛織の帽子と載きて獨り巴里斯の都門小

へり或る街小到りて事ハ折節此鬼小學校の少年多く群集りて互小戯を遊び居けるが良美由須が田舎糞束小て物珍らしく左右を顧みつゝ過行まり様子ハ紛れり死田舎者と見へる事ハ彼少年等是れを弄びと思ひ忽ち良美由須が周圍小集り来りて色々の事を問うけ或ハ嘲り笑ひたりと終小ハ暴き舉動をもちけり小そが中小心意やさしき一人の少年アリ良美由須が顔色の青くして瘦せ衰へたるを見て

貧しき人の飢たるなりと思ひ少許の蒸餅
を取きて良美由須小與へ赤色ハ良美由須ハ之
と戴きて食ひ其為ニ忽ち力を得たる容子ふて
我甚ど遠き路を旅して大ニ疲色なりといふ彼
の少年等ハこの言を聞て心かく暴き取扱ひと
かりたるをも自かたいと愧かしきこと小思ひ
共々良美由須といさりて傍ら小坐せしめし
里斯りしハ良美由須も又甚ど心嬉しく氣も
爽々ふりりて彼の少年等が打てりしりたる深

切小て良美由須が身の上と其旅行の様子とを
委しく尋ねるも一々其の返答をなしたると
ど其返答の次第ハ下文小記せし良美由須が物
語小して其言巧みなり又かぎりありを見り小
足る人
我八年前久須の里小て生れ初て歩む習ひし頃
しつかりくも吾兩親を亡ひ我を養育する親類
とてもゆきぎとバ詮方あく里内の善人小たよ
り其慈悲を乞て終り小朝夕の露命と繋ぎ粗末

の蒸餅とて之を貰ふて吾飢小充るゝれ八十
分の事と思ひ偶々一匙の乳粉一本の生葱又ハ
少一の塩を得るバこの上もたき幸ひと思へり
斯て我漸く生長しもバ最早里人等ハ一日と
も遊惰小送ると許さば吾手小長き竿を取らせ
て鶯鳥の番をあさしめたり我日毎小彼の鳥を
駈て沼田まで追行しガ吾身の疲勞ハいそん方
なくゆして彼の鳥ハ固より吾聲を聴き覺を縦
令竿小て鞭うつとも決して吾意小従がとれ此

所彼所小け廻りて日の暮る頃再び彼の鳥を
駈を集めて主人の家小連歸るハいとく六敷仕
事ありし或る日此鶯鳥の爲め余り疲れ事さバ
終小鶯鳥を其終沼田小放ち置き彼の竿をも森
の中小投きて志ざしを決して巴里斯の方へと
出立せりさきとて路用の金子も何となく
方なき小人の戸口小立て食をも乞ひ事あり
然る小吾が運命未だ拙あかきさるや途中小て
一人の君子小出逢ひ暫くの間我を伴ふて旅行

を許さきたり蓋し其人ハ必大なり學者
ふてありし人何ふとふまへ彼の人と共
宿を取し一夜ハ終宵我ふいろはの文字を教
へ且此いろはもて語を綴るの法をも教へた
は是ふて知るべきなり今我此巴里斯ふいろは
とて一錢の貯へもふくして舊時の如き貧生ふ
きども吾旅の途中ふて此事ありしより頻小學
問を為人との望を起せり噫天若し我を憐む
らば諸君の中誰か一人として吾教育を助くる

の情を起さしめざらんや
良美由須ハこの物語を終りて後彼の少年等の
為め學校ふて小廝の役を勤め食客となりて教
を受たしとの義を歎願しけきバ彼の少年等こ
の願を兼知したきども良美由須が止宿の場所
ハ固より約束の外なきバ良美由須ハ止むこと
を得て夜毎小市中の橋下小往て卧せざりを得
て良美由須ハ斯る身の艱苦不便利なるをも更
ふ厭ハむ只管一心小學問ハ勉強し日あつて

て羅典希臘の古語とも覺へけきバ學校の或る
督學先生の目小より其人の世話ふて更小規
則正しく教を受るの場合小到るべき斯て良
美由須ハ終小有名の大學者トハあまり其博學
ふると世小珍しき英才なりトハ彼が數多の著
書を見て之を證るべし又亦小所謂大學者
もの多しと雖ども猶良美由須が如く名聞高
く衆人の嘆稱を得たる者少く又其爲良美
由須が如く衆人の妬心を受たる者ハはた惜

哉良美由須ハ年五十六歳ふしと其の騷乱小逢
ひ不幸ふして無道の殺戮を受たりといふ
麻久列五留と良門土との事
怒と殺せざるを得ざる時能く憤怒の氣を抑へ
讐を報いざるを得ざる時能く復讐の思を断ハ
誠小人たる者の尊き行ひと云ふべきなり往昔
蘇格蘭小住めり或る一人種の酋長某ハ能く此
行ひをなす遂たる者と謂ふべし即ち其人の一
例ハ最も美談ふして永く亦小傳ふる小足るべ

きなり

此首長の名を麻久列五留といへり或る日其
 子同少年の友達數人を伴ひ山野の狩ふ出行
 一が此所彼所を徑巡る内良門土といへる少年
 小出逢ひたりこハ兼て親しき知人うきハ共
 小憩せんものと少年の面々打連て最寄の旅籠
 屋小立寄たり扱此麻久列五留の子息と良門土
 とハ斯る親しき朋友の出會ふも此旅籠屋
 小て共小酒を飲始め一が不圖鎖細の事より争

論を起し双方とも酒氣頭腦小上り智慧今別も
 薄ろぎて心兇猛しく成たまハ忽ち互小讐敵と
 ハなまり此争論の元の起りハ如何なり一や別
 小記せしものもやあせど必竟之を察する小恐
 らくハ此方より戯れ一人の盃を敲き落した
 ると見彼方ハ深く我を輕蔑せし舉動と思ひ
 一あらん又或ハ彼方より誤りて足の指を踏
 めバ此方ハ憤りて彼方の顔小盃を投付し
 らんハ兎角小酒又酔たる人ハ一寸一と事より

も争論を起し、そのなり、叔此時の争論漸く聲高
 小なりて、忽ち拳の打合を始め、果ハ双方劍を抜
 て戦ひ、一が竟小良門土ハ短刀、一が麻久列五留
 が子息の胸を突通せり、斯て良門土ハ人を殺せ
 一より心小恐を抱き、暫く忙然と立居たり、一が
 良門土ハ元来柔和温順の少年なり、と此時ハ酒
 の為小心兇く人殺しとハかりたり、あり却説こ
 の騒ぎふて混雑せる隙を伺ひ、良門土ハ何國と
 もなく逃行しが、彼の少年の銘々ハ酋長の子息

を殺さしたれ、良門土ハ跡を慕ふて追行あり
 良門土ハ逃る路小て日暮けき、幸ひ路傍の
 生茂りたる樹の下蔭小潜より、深く身を匿し
 其夜も、や明ふんと、も頃見當りたり、近き人
 家小到りて、案内を乞へり、此家の主人、其聲を聞
 て、門の戸を開け、顔色惨然たり、見馴ぬ少年小
 ていと疲れたる体なり、此少年の云けるハ、君願
 くハ吾一命を助け給へ、数人の少年、我を殺さん
 とて追り、け来りたり、と主人之を聞て、足下ハ如

何なる人小もせよ斯て吾家小何人小ハ假令
何事ありとも一命ハ大丈夫ありと云つ良門
土を奥坐敷へ案内して一家の眷族小も面會せ
しめたり斯折しも又門の戸叩き大音ふて一
人の見馴ぬ少年この家又来りやと呼りけ
きバ主人答へていり小も其少年ハ吾家より
汝ガ輩この少年小何等の用向ありやと云ふ
バ此時追人の面々其少年ハ昨日不圖一た争論
より君ガ賢息を殺せしものふきバ衆即坐小其

鬱憤と晴さんため追掛来りたり急ぎ其少年と
此へ出し給へと口々小呼りたりを斯く云ふ人
々ハ昨日麻久列五留の子息と共小狩又出掛
少年等小て良門土を匿ひたるハ麻久列五留ガ
住家なりし叔麻久列五留ガ妻と二人の姉妹と
も事の次第を聴て驚き心も裂る計をふて泣悲
し居たりけり良門土も今ハたよりり杯を
なくとして主人小向ひ吾罪已小露見せし上ハ
今更君ガ助けと需る小道小彼少年共小我

を渡し給へといひおきば此時門の口ハ敷人の
 少年面々抜身の刀を振立て其少年を此へ出
 給へ彼已小生べき者小なりと口々小叫び
 首長麻久列五留追人の者小云ひあり汝
 等静々小我言ふことを聴けよ汝等若し我子の
 面目を重んずなれば定めて我面目とも亦重ん
 るあふ人汝等今一人たりとも決して此少年小
 手ざしむること勿き其故ハ我一旦彼が命と救
 はんとの約束なりよとハ今更其詞は違ひ難し

さきバ此少年の吾家小あり間ハ其命小於て
 安穩なれどざると得むと斯く立派小云ふも麻
 久列五留ハ兩眼より瀧の如き涙をたらくと流
 しけり其心中ハいふあふ人や麻久列五留ハ頗
 て彼の追人の者を追ひ歸して良門土を色々深
 切小饗應し加之なりと武器を装ひし者十二人
 を召連て自か小良門土を警護して其親族の住
 所中々難なく送り届け其別々小臨んで良門
 土小云まりの足下の身も已小安穩とさきバ我

最早足下を護ること能く足下再び吾人種の
境内へ入ること勿き嗟天足下が罪を赦して足
下不幸を賜ふんと斯て麻久列五留ハ吾家
の方へぞ歸りて

良門土ハ麻久列五留が舉動の氣高きを見て大
小其徳又感ふ天を拜して何時の二の大恩を報
ゆべき時の至らんこと祈りたりさて光陰ハ
矢の如く良門土ハもや壯年の男子とあり兼て
誠実の心より前非を痛く後悔し其行ひを改め

て温厚柔和の人物といふ事とされども折々ハ
過小し事を憶ひ出して甚だ心中亦も快よろし
き事と斯て月日を送る内此國の政府亦て不
正の更置ありしより麻久列五留が家産を欠所
ふし加之あつて當人をも罪小處せんとして捕人
の者を差向けしり斯て麻久列五留ハ良門土の
方自身を避りし良門土ハ兼て待得たることお
きハ此機會を思ひ其嬉しき事覺えど涙を
流しつゝ麻久列五留及び其家族までも厚く痛

何事も眞実不取扱ひ始めて奮恩を報ひ
たは良門土の大惡無道の行ひも今ハ聊々其
罪を贖ひ得て老後臨終の時及びても死出の
心安くして其往生を遂げしむ

金財布の事

魯西亞の首府ある新都平土留保留府を距ること
九五里計の處一小都會の地あり此地ハ
人の貧しき老婆住あり其所持の物としてハ唯
びし草舎のありて折々船主の來るを頼

小細き烟りをけ居たり或日の夕方和蘭の船
主數人この家にて夕飯を食し已不出立せし後
おて彼の老婆ハ食椅の下より封印せし金財布
を見付し出せりこハ今歸りたる船主の内おて誰
か忘き置たり小相違なけきどももや其人々ハ
船を乗出し折柄順風小帆を揚たることなり色バ
再び歸るべき折もなく此老婆ハ生得善人おて
聊の私欲ふも色バ彼の金財布を拾ひ小房の内
に藏め置きて忘し一人の尋ね來ると待居たり

斯て七年の又一きを經も絶て之を問ひ來る者
もふりりーが此年月の間ハ金子入用の折も
多く殊小貧苦小迫る身ハ履々老婆が鄙き
心をも誘ひよきと固より天性の正直者なりきバ
變てかの財布ハ手も觸ることありてきり
叔或日薄暮の頃例の如く船主四人連ふて此家
小立寄り小憩せり其中の三人ハ英人一人ハ蘭
人の様子なりーが互小四方山の物語をせり
内一人の英人蘭人小向ひ君曾て此地小来りー

ことりりやと問へば蘭人答へて我先年此地小
来りーが今小於て此地を忘ま難きことりり我
こ小来りー為め小七百ロベルロベルハ魯西
亜銀の名大九
我二十五の銀子を失へると云へり英人の云く
錢ハ同ト又何故なりや蘭人の云く其仔細ハ我先年
此邊の茅屋小て金財布を置忘りことりり云々
と物語る時彼の老婆ハ同ト一間の隅の辺り小
坐を占て此話小熟々と耳を傾け聴居たりーが
蘭人小向ひて君が置忘ま給ひー金財布小ハ封

印はくくーやと問けまバ蘭人答へてそハ勿論の
 ことなり其封印ハ余ガ此時計の鎖小付たる封
 印を用ひーなりといへバ彼の老婆ハ目前封印
 の偽りなりを見て君ガ金財布ハ封印さへはる
 かなバ金子ハ必も再び君ガ手小入るべーとい
 ひもまバ蘭人の云く其許ハ吾銀子の手小入る
 ことも何んらと云ふよりかかハ決して無き
 事なり吾銀子を回復さんおも已ふ其機会を失
 ふたり其許云まら如く小座の人ハ皆正直か

らをやりて余ガ銀子を失ひー以來とや七年の
 久しきを過るをや願くハ此事を再びいふこと
 勿き我常ふ之を思ひ出せば其為小心の鬱憂を
 覺ゆなりと云て此折しむ彼の老婆ハ竊小其
 席を立て彼方の部屋小到りまらガ間もふく手
 小一の金財布と携へいでこき見給へ君ガ謂
 きたる程ふハ座の中まハ正直者も稀るふと
 云ひつゝ彼の財布を机の上ま投出したるさき
 一坐の船主等ハ事の意外小出たり小驚きま

仰天一殊更金を失ひ一蘭人の飛立むる喜び
一ハさらば何んと思ひ遣らむなり此蘭人の
直小金財布の封印を開き一ロベルを取出し机
の上又置て々の老婆一禮を述べ其勞を謝
一もきバ三人の英人のこの謝金の甚少き儀
見て或ハ驚き或ハ怒り頻り熱くやりて物事
の道理を論ぜ一とぞさきども老婆ハ我唯人た
るべきの職分と盡せ一のなれば決して謝金
と望むの道理なりといひ一蘭人が與へたる一

ロベルをも故お叔め給へといふ然きども彼の
英人等ハ目前の公断と失ふべからざる様
々の義理とのべ此老婆ハ感心おも氣高き行ひ
を為したる者なり其報賞ありるべしと
云へ一蘭人も亦終ふ此理小服して百ロベルを
もて謝まると決まり金財布の内より之を
今ちと老婆小與へたり斯て々の老婆ハ已が正
義の行ひふよりて公然と厚き報賞をも得たり
とぞ

自かゝ省みる事

爰あふ一人ひとりの有徳のうとくの者もの有りありたりが其その一子いちしハ生得せいとく
 愚おろろふふく父ちちの行なひひ小肖せうむむ且かつ父ちちの意見いけんとも用もち
 みるみるふふく日常にじやう悪友あくゆうと交まじりり淫乱えんらん放蕩ほうたうふののと耽たんて
 ませませバ其心そのこころ益ますます腐くさりり全ぜんく身みの徳とくと失うしなふふ至いたるる
 正ただささききバ彼かの人ひとハ吾子わがこの斯かく身持みもちの放蕩ほうたう又また流なが
 るるを見てみて心中こころ痛いたく悲かなしし居ゐたりり不圖ふと重おも
 き病まみみ不罹ふらいと自みづかりり其死期そのしき小顔せうがんよりりたたるるを知しるる
 一のひと子こを枕下まくらした小呼よひひ寄せよせせ云いふふハ汝なんぢ自みづかりり

身持みもちの悪わるきき煩わづ悩なやみみららひひ我辱われをししめめを受うむむとて恐憚おそ
 りりるることこと勿なららずず我われハ今いまふふも世よを逝さるるべき身みああははバ
 汝宜なんぢがしく吾名跡わがなあとを續つべべししききバ今汝いまなんぢハ云いふふべ
 き吾臨終わがらんしゆうの一言ひとことありり之これを守まもるるハいと容易たやすききこ
 とことなりなりバ汝必なんぢがずず此契約このけいやくを我われと結むすび得えべべししとい
 へいバ彼かの子息このしき答こたへへて吾身わがみ小叶せうひひししことことなりなりバ
 何事なにごとももてても父ちちの遺命いのみことを守まもるるべき契約けいやくを結むすぶぶべ
 ししと云いふふ此時このとき死しは臨まりりたりり老人らうじんの云いふふ我われ汝なんぢ
 と契約けいやくせんんと云いふふハ餘よの事ことももななしし吾わが去さるると去さ

その後ハ二個月の際必む毎夜此坐鋪不來
て獨り坐を占め一時半づ思案不時を費
しといひまきバ彼の子息ハ必む眞実不父の訓
を守らんとの誓を立たり老人ハ大に喜びて
其子を譽めつゝ頼てをりやうも此世を去
り斯て葬式を營み終り彼の子息ハ旧の如く悪
友と交り身の上の考へもたなく樂し居たりけ
るハ必む日の暮る頃ハ嚮の契約を思ひ出
て父が臨終の面影のほろくくと其心を責る

己ことを得む彼の坐敷ハ到せども初の内ハ
獨り居るを甚ど苦しく思ひ且坐敷の内ハ寂々
として物をぞく何となく恐怖の心ありさ
まども終々二個月の月日ハ忽ち過去るやう
と思ひ既ち誓を立しことなりバこの淋しさを
も堪忍びたり斯て彼の子息ハ夜々此坐敷不來
て考ふる際不圖己が身持の悪き心付きて
己が身をバ己が心おて責め自然と天を畏る
の志を起し自かゝ問て自り答つ終不潜然

と涙を流さず至り其後ハ志一を改めて全く従
前ハ異なる人物とハなりしなりといふ

富る人と貧しき人との事

今日開化の國ハ就て其農工商の三民を比較
すハ身の苦勞ハ於てハ強ち女人の想へる程貧
富の間ハ區別あることあり抑貧しき人の中ハ
ハ實ハ食物の乏しきガ為ハ餓死する者も少
ど食物の饒きハ其乏しきよりハ害甚だしく
て飽食の為ハ死するものハ其飢渴よりして

るより多し又衣服ハ就てハ貧
き人ハ寒氣を防ぐ術なくして凍へ慄ふ者も
何とど富る人ハ衣服の仕立ハ於て身ハ害あり
好まぬ一必む時の流行ハ随ふて様々窮屈の衣
服を用ひ其為ハ病を招くもの貧しき人ハて衣
服ハ不自由なる者よりハ甚だ多し其故ハ世の
富家は生々錦繡を暖々ハ着過して其為ハ早く
黄泉ハ往く者ハ彼の身ハ纏ふべき襤褸もなき
乞兒の橋下ハ死するよりハ亦更ハ多きは

り又貧しき人の假令度を越て身を勞むること
屢あまども其身の苦勞ハ却て富る人よりも多
かざる何小とかりき人の身を勞むるやこ色昏
天性心の求る所あり若し富る人ふて此求め
小應どくき何等の事業もなれば時ハ一生の際大
切の目的を失ひたる者と云ふ辱もきばなり且
何等の事業もななくして身体の憊きたるハ勞役
過度の為小身体の疲るより其害甚だし
らん懶惰の少年悠々と市中小徘徊無用の時

間を費して彼の事業ニ勉強する貧人の為小其
妬心を起るんかたき斯く他人の妨げをあむ者
ハ大率ね富貴の人ふあるなり

酒を禁ト食を詐る事

近代の學問ハ於て酒類ハ悉く人身ハ害ありと
の道理と益々明ら小知り抑酒の害を來るハ
寛慢なりきども必竟多く之を用やるハ心身共小
その力を失ふハ必定なり且酒を用やるハ人の
頭腦を害して其身ハ諸病の種を蒔き人を惰ら

一、人々を愚小し人の不善を招くものなり或ハ
強き飲料ハハハハの水を加へ用ふまバ其害少
かしと思へる者もなれどこハ大なる誤りて假
令水を加ふるも只酒の毒を薄りたるよりこの
とより武蘭実初須喜ふと水を加ふるも決
て其毒性を消さるのハ何れも唯劣るハ其味を
よくするものなり若し飲酒の友ハ誘ふ者ハ
ハ必之を賤みて避ざるべからん人間の飲料
中あて最も良きものハ水なり水を飲ハ血を清

涼純潔小し且胃府頭脳等の機用を調へて和順
あつむるものなり故に水の如きハ心を爽
みし身を強くする最上の飲料と云ふべき
聖嘗て或は兵卒の栗宮歐羅巴魯西亜の名
りし書翰の文言ハ云く蔡屯管中只の一夜も寐
床の中ハ睜しこと多くハ地上ハ卧し或ハ
船の甲板上甲板して夜を明せりまも吾身ハ少
しも平日と異なるなり其杜健なる所以ハ全
水よりも強き飲料を用ひざるよりなり其證

抑ハ我同隊の中ふて慄烈飲料不耽^たたり者ハ
大抵病不侵^おさきざれハふ^こ此地ふて死^しし
者の十中の八九ハ必^も大酒を嗜^たりたる輩^{しゅう}なり
故^ゆふ穢^けが如^{ごと}く始終雨露^{うろ}ニ身^みを晒^{さら}る者ハ假令^{たと}一
滴^ての酒たりとも必^も用^{もち}ひざるを上策^{じやうさく}とあせり
と^しん但^た何^{なん}方の土地^{とち}ふ於^おりも又^{また}如何^{いか}様の生^な
計^{けい}を為^なし人^{ひと}ふても酒^{しゆ}を戒^{けい}むべき道理^{だうり}ハ皆^{みな}同^{どう}
事^{こと}と知^しるべし
若^も酒^{しゆ}の大^{おほ}きある害^{がい}ありて聊^{いさ}も益^{えき}あることと知^し

且^ま全^{ぜん}く飲^の酒^{しゆ}を禁^{きん}むる者^{もの}ハ又^{また}兼^あて食^{しょく}物^{ぶつ}の度^どを
定^{さだ}めざる^る者^{もの}ハ大^{おほ}醫^いの説^{せつ}ふ云^いく過^か食^{しょく}の害^{がい}ハ
大^{おほ}酒^{しゆ}の害^{がい}不^お齋^{さい}しと又^{また}古^{ふる}き諺^{げん}云^いく毒^{どく}人^{じん}己^{おの}の齒^は
を以^もて己^{おの}の墓^ぼ穴^{あな}と掘^ほりたる多^{おほ}しと此^こ言^{こと}実^{まこと}不^お信^{しん}
あり哉^や

ナルゼ 第三リイドル卷の下終

Blank page with a faint rectangular border.

